

日本消化器外科学会雑誌編集後記

2014年、平成26年が始まりました。昨年はなんとといっても東京オリンピックの開催決定が最大の明るいニュースだったように思われます。一方で、領土問題、歴史問題をめぐる近隣諸国との関係悪化も伝えられました。医学の世界では良好な協力関係が続いてきた近隣諸国との関係が、平和の祭典への準備を通じて、よい方向に向かって行くことを願わずにはられません。

日本には、「一年の計は元旦にあり」ということわざがあり、お正月に一年の計画を練られる方も多いことでしょう。英語のことわざに、「Well begun is half done. (始めがよければ半分終わったのと同じこと)」という言葉があります。「慎重にとりかかるべきだ」ともとれるし、また、「あれこれと考え込んでいるよりも、まず実行に移すべきだ」という意味にも解釈できます。外科手術においては用意周到な準備のうえで手術にとりかかることの重要さはいくまでもありませんが、学術論文においては著者のレベルにもよりますが、「まずは書いてみなさい」と指導する機会が多いように思います。まず実行に移すべきことの好例といえましょう。しかし、一人前の外科医とは「手術を終わらせることのできる外科医」であると同様に、論文で大切なことは、論文を書き上げ、投稿し、そして最終的にアクセプトに辿り着くこと。すなわち、その論文を終わらせることです。そのためには、それぞれの過程において必要以上に時間をかけないこと、空白期間を作らないことが重要です。

オンライン査読の時代に入り、本誌編集委員会でも遅滞なく査読をおこなうよう努めております。たとえ大幅修正や不採用の結果が返ってきたとしても、しばらく放っておきたくなる気持ちを押さえ、査読者の意見を参考にして遅滞なく改訂に着手し、粘り強く本誌あるいは他誌へ再投稿していただきたいと思います。一つ論文を終わらせると、次の論文に円滑に着手でき、すべてがうまく回り始めます。

さて、今月は原著1編、症例報告9編の計10編が掲載されています。原著では、胃癌手術のリスクと予後について85歳以上の超高齢者と75歳以上85歳未満の高齢者が比較検討されており、超高齢社会を迎えて大変有意義な内容となっています。ぜひご一読ください。

本年もよろしく願い申し上げます。

(橋口 陽二郎)

2014年1月1日